

IAAL

Institute for Assistance of Academic Libraries

ニュースレター

アイアールニュースレター

【特集】

エキスパート制度

MAR. 2026

No.16



「支援」について、考えてきたこと

東京科学大学 戦略本部特命専門員（研究DX担当）

茂出木 理子

大学図書館界では、流行語のようにキーワードが次々と移り変わりますが、一貫して語られ続けているキーワードがあります。それは「支援」です。図書館や図書館員が行う支援を拡充し高度化することで、親組織である大学の中で図書館の存在感を高めたい。ひいては、多くのステークホルダーに貢献することにつながる。このように「図書館の業務は支援こそが本筋である」とする論調はよく耳にします。もちろん、それに異を唱えるものではないのですが、私は、この「支援」という言葉に、どこか表面的で一方向的なニュアンスを感じ、長年「もやもや」し続けてきました。1999年4月に東京大学で学術情報リテラシー係長を拝命し、学修支援の業務を推進しと命じられてから、実に四半世紀にわたって、「もやもや」し続けています。

本ニュースレター復刊号（2023年12月）での、岡田理事長の巻頭言は「IAALにしかできない社会貢献とは何であるかを常に問い続けながら、これからも活動を続けて参ります。」と結ばれていますが、IAALは法人名称にあるように「大学図書館とその利用者に対する支援業務」を通して、社会貢献を行うのがNPO法人としてのIAALの活動本筋であるという文脈だろうと理解します。そして「常に問い続けながら」こそが、支援業務の本質であるという点に、強く同意するものです。

さて、東京外国語大学勤務時には、大学出版会の仕事にも携わったことがあり、そのご縁で様々な専門家の先生方から実に面白いお話を直接お聞きする機会に恵まれました。その中でも「支援」に対してもやもや考えてしまう時に思い出すのは、ブラジルの処世術「ジェイチーニョ (Jeitinho)」です。ジェ

イチーニョは、相手や状況に合わせた柔軟な対応ができることを指しつつも、都合よく、利己的な行為もジェイチーニョと呼ばれるようで、非常に複雑で一筋縄で理解できるものではありませんが、実に面白い概念だと衝撃を受けました。興味のある方は、ぜひ武田千香先生の『ブラジル人の処世術～ジェイチーニョの秘密』（平凡社新書738、2014年刊行）などをご覧ください。

私が過去に書いたものを掘り起こしますと、2009年に『丸善ライブラリーニュース』に「お茶大図書館ハッピー宣言!」という一見お気楽なタイトルで書かせていただいたものがあります。この中で「図書館やスタッフ自身がハッピーでいなければ、良いサービスは生み出せない」と断言していますが、ハッピーであり続けるのは、危機感もなく能天気であることではなく、矜持をもってハッピーであり続ける努力が必要であると（偉そうに!）述べています。

私自身、この気持ちは現在に至るまで一貫しています。「支援」という文脈に置き換えると、支援とは、担当者が自分事として、日々悩み、問い続け、技を磨き、知識をアップデートし、他者と協働しながら視野を広げることでしか成しえないものだと考えます。

「支援」は、相手や対象に「寄り添う」というキーワードで語られることも多いですが、換言すると「心理的安全性」の担保でしょう。「寄り添う」に内在する感情的な優しさも必要ですが、それ以上に、冷静なデータや記録の積み重ね、客観的な視線やコメントなどがもつとも優しい「支援」ではないでしょうか。そして、その積み重ねこそが、図書館という場をより豊かにしていくと信じています。

IAALエキスパート制度の 開始について

IAAL理事 島田 貴司

概要

NPO法人大学図書館支援機構（以下IAAL）では、2025年度より「IAALエキスパート制度」という名称の取り組みを開始しました。これは、（大学）図書館における広範囲に渡る課題に対応した分野の専門家や現場における実践者にお声がけをさせていただき、「IAALエキスパート」として、IAALの研修事業を中心に様々な活躍をお願いするものです。

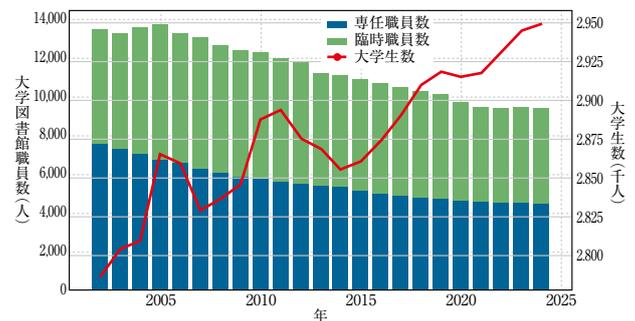
IAALはこれまで組織の名称が表す通り、大学図書館支援に関する多彩な研修事業を始めとした事業を行ってきております。多様性や包摂性が高まるこれからの世界において、IAALでは、大学図書館に軸足を置きながらも、大学図書館以外の館種にも、共有できる課題も少なくないという考えのもと、目をむけていければと考えております。多くのご専門やご経験を有する方々と、「IAALエキスパート制度」という緩やかな連携を通して深めていくことにより、IAALがますます（大学）図書館において多くの連携や協力、サポート等ができるようになることを期待しているものです。ここでは、「IAALエキスパート制度」開始の背景や活動内容に加えて現在、活躍してくださっているIAALエキスパートについて紹介させていただきます。

背景

オープンサイエンス時代を見据え、イノベーションのスピードが加速度的に高まっています。このような世界の情報環境において、高等教育機関の図書館が担うべき役割は増加の一途をたどっていると感じています。OCLCのブログで“The Library Beyond the Library”⁽¹⁾と紹介されているように、研究支援に関する環境の改善はもちろんのこと、従来の「図書館」における利用やサービスの在り方も、加速する世の中のDX化に向けて劇的な変化が求められることになるでしょう。それらに対応する体制の検討や環境整備、人材の育成は一朝一夕にはなしえませんが、一方で、日本国内の大学図書館の現場では、これらの増加し続ける環境やサービスに関する課題に相反する形で、予算や人材や情報共有等の課題が常に存在しており、その課題も時代と共に変化してきています。

これらの課題は、文部科学省の「学術情報基盤実態調査」⁽²⁾、「学校基本調査」⁽³⁾からもうかがい知ることができます。図書館にパソコンの普及という形で業務のデジタル化が始まった1990年代後半以降、国公立大の図書館の職員数は減少の一途をたどります。国公立大の図書館の職員は、2002年には13,475人（専任職員7,577人、臨時職員5,898人）でしたが、2024年には、9,430人（専任職員4,506人、臨時職員4,924人）と、20年ほどで約30%減少（専任職員は約40%の減少、臨時職員は約

図1：大学生数と大学図書館職員数の推移(2002-2024)



17%の減少)しました。一方、国公立大に在籍している学生数は2002年に2,786,032人だったのに対し、2024年は2,949,795人と約5%増加しています（図1参照）。これは、単純計算で、2002年に図書館職員1人当たりの対応学生数が約207人から、2024年には図書館職員1人当たりの対応学生数が約313人に増えたことになります（当然、この間にアルバイトや委託業務の増加もあり、この数字が課題の全てではなく、一つの目安です）。

このような状況において、日本国内の大学図書館に関する課題は、一つの大学、一つの地域、国立・公立・私立の別なく、共通しているものも多く存在しています。デジタル技術が普及する前の時代は、大学図書館の職員は、各大学図書館において、豊富な経験を持った先輩諸氏に業務を教えていただき、後輩に伝わっていくという流れがありました。また、学外にも様々な組織（国立・公立・私立別の図書館団体や地域ごと、専門分野ごと）が活発な活動を行い、競うように活動成果を発表していました。ところが、デジタル技術の普及は、図書館業務にこれまでのノウハウの継承では業務は継続できないというパラダイムシフトを引き起こしました。加えて、特に私立大学では、効率化や省力化といったキーワードと共に業務の委託化や人員の流動化が、良し悪しに関わらず、大学図書館の現場に大きな影響と課題を与えました。一例として以下のような事例が挙げられます。

- (1) 新しい技術や機器類（これらも頻繁に機器が変わり、ソフトウェアがアップデートされることにより、ユーザーインターフェースが変化しています）を活用し、多様なメディアをどのように収集・整理・保存・公開していくべきか。
- (2) 利用者に日々、発信され続けている無数の情報源から何を取捨選択し、解釈・理解して発信するのかという、情報リテラシーに関して、誰がどのように伝えていくのか。
- (3) 日々進化していくAI等の先端技術を、図書館ではどのように位置づけて活用していけるのかを考えること。

これらはごく一例にすぎませんが、このような課題に直面しつつ、日々、変化していく社会において、大学図書館が利用者の

ニーズに対応していくためにIAALも活動してきました。

これまで、多くの大学図書館で感じているはずのこれらの課題について、多くの知見をお持ちの方々が国内の様々な団体において研修会や講習会の場で発信されてきております。しかしながら、そのような団体も、上述の労働人口の減少や業務の多様化と一人当たりの業務量の増加、人材の流動化等により活動規模の縮小を余儀なくされ、新しく大学図書館の業界に入ってこられる方が知見を得られにくくなっている現状もあります。そのような中において、IAALが多くの知見をお持ちの方々にお声がけさせていただき、大学図書館を中心に様々な情報を発信していく必要があるのではないかという考えのもと、今回の「IAALエキスパート制度」を開始させていただいた次第です。

活動内容

現場目線で、かつ、(大学)図書館の業界に入りたての方々も含めた多くの方々に(大学)図書館の様々な課題や取り組みを知ってもらい、ご自身の職場の業務について考える機会や課題解決の糸口の提供を目的としたオンライン勉強会である「Evening Café Online」を2025年5月に開始しました。こちらは年に1回程度で、多くの人に興味を持って気軽に参加できるような取り組みとしております。

1回目は「大学図書館における協働と共創～学生、教職員、地域、社会とつながる新しい学び～」というテーマで実施しました。こちらは、実施内容の一部を映像化し、大学図書館支援機構のYouTubeチャンネル⁽⁴⁾に期間限定で公開しました。また、こちらの連動企画として、株式会社 樹村房様による書籍化が行われます(2026年6月頃刊行予定)。更に、こちらの書籍の出版関連イベントとして、図書館総合展のオンラインフォーラムを実施し、その際の動画につきましても、YouTubeチャンネル⁽⁵⁾(株式会社 樹村房様とのコラボレーション)にて公開中(2026年3月現在)です。

今後も継続的に(大学)図書館に関連する方々が「今さら聞けない? 今こそ知りたい!」と思えるような内容のトピックを取り上げて、その道の専門家や、現場における実践をされている方々を「IAALエキスパート」としてお声がけさせていただき、現場で活用できる知見を参加者の皆さんと共有していければと考えております。どうぞご期待ください。

IAAL エキスパート紹介

IAALエキスパートは、「Evening Café Online」やその他のIAALの活動に関わってくださった図書館が関係する様々な分野に造詣が深い専門家や有識者や現場の担当者などの幅広く様々な方々に、情報発信をしていただくサービスです。1回目の「Evening Café Online」に関わってくださったIAALエキスパートについて紹介させていただきます。

野末 俊比古 氏

青山学院大学教育人間科学部教授・学部長、同大学革新技術と社会共創研究所副所長。学術情報センター助手、文部省社会教育官、国立情報学研究所客員准教授などを経て、現職。NDL科学技術情報整備審議会基本方針検討部会長、東京都立図書館協議会議長、JLA図書館利用教育委員会委員長など

も務める。専門分野は図書館情報学、教育情報学。関心領域は情報リテラシー教育、学習資源(教材)開発など。

石川 敬史 氏

十文字学園女子大学教育人文学部文芸文化学科教授、学長、図書館長。筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎専攻博士後期課程修了。博士(教育学)。都内理工系大学の図書館、総合企画室を経て、現職。

主著に、『移動図書館の「いま」』(日本図書館協会、2025)、『文化の朝は移動図書館ひかりから』(分担執筆、日本図書館研究会、2017)、『図書館の現場力を育てる』(共著、樹村房、2014)など。

豊田 哲也 氏

BIPROGY株式会社 人的資本マネジメント部、IAAL理事。小売業界、大学業界、人材育成支援業界を経て、2025年度より現職。前職で様々な業界の企業における人事、人材開発部門の組織開発、人材開発に関する課題解決支援の経験を活かし、現職の経営幹部候補やその候補となるマネジメント層全体の育成業務に従事。

2023年度より、IAAL委託講師として、私立大学図書館協会東地区部会のスキルアップ研修に登壇。前々職での大学図書館の勤務経験を活かし、「学生協働」や「利用者教育」等のテーマで理論と実践を交えた研修を提供している。

島田 貴司

立正大学学術情報部部長、評議員。IAAL理事。前職はシステムエンジニア。転職後に図書館司書、文化財IPMコーディネーター等を取得。図書館業務に関する知識を深めるべく大学院(図書館情報学、修士⇒博士)に進学、在学中。

立正大学品川図書館・熊谷図書館で学生協働団体立ち上げ。図書館×学生協働×地域連携を意識した業務を推進中。2025年イリノイ大学モーションセンターアソシエーツ(私立大学図書館協会派遣)。

参考文献

- (1) Brian Lavoie, Hanging Together, the OCLC Research blog <https://hangingtogether.org/the-library-beyond-the-library/>, June 5, 2024
- (2) 文部科学省「学術情報基盤実態調査」 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/1266792.htm
- (3) 文部科学省「学校基本調査」 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm
- (4) YouTube大学図書館支援機構公式チャンネル <https://www.youtube.com/@catiaal9445/featured>
- (5) 【IAAL×JUSONBO】いまさら聞けない いまこそ知りたい 大学図書館における協働と共創：学びをつくる／ひろげるために オンライントークセッション【図書館総合展2025】 <https://www.youtube.com/watch?v=RtSLfgsb6Q>

2025年図書館総合展 IAAL×JUSONBO オンラインフォーラム

「今さら聞けない？ 今こそ知りたい！」

大学図書館における協働と共創：
学びをつくる／ひろげるために」

トークセッション 誌上採録

エキスパート制度の企画「Evening Cafe Online」から始まった株式会社樹村房様との書籍化企画を記念し、2025年11月16日、図書館総合展オンラインフォーラムにて本イベントを開催しました。4名の著者がそれぞれ担当章の内容を発表し、相互に質問を交わす形式で進行し、密度の高い充実した時間となりました。以下、そのダイジェストを掲載します。

開催日：2025年11月16日(日) 13:00～14:30

動画のアーカイブはこちらから ▶ IAAL YouTubeチャンネル <https://www.youtube.com/@catiaal9445>



動画
公開中

「協働・共創とは」

野末 俊比古 氏(青山学院大学教育人間科学部教授・学部長)

今回のテーマである「協働と共創」とはどういうものか、私が担当する第1章において概説しています。第1章は、大きく三つのパートに分かれています。

第一に、大学図書館の最近の動向をざっと振り返っています。新しいところではオープンアクセスの義務化、教職協働などが挙げられますね。

第二に、協働あるいは共創をどう捉えるかについて述べています。第1章のポイントとなるところです。「連携・協力」は、こちら側にやりたいことがあって「協力してよ、連携してよ」と、サポートするパートナーを探す感じです。しかし、「協働」は、それぞれがそれぞれの目的を達成するために手を組んだほうがよりうまくいくね、というものです。こちら側もパートナー側もお互いの目的を尊重しながら物事を進めていく、というところが大事です。

第三は、マネジメントの観点から論じています。具体的などは第2章以降に書かれていますが、それぞれの目的をどう擦り合わせていくかを含めて、自分のところだけでなくパートナーをも俯瞰して、全体をマネジメントする視点が大事になる、という話です。

第1章には、おおむね以上のような内容が書いてあります。この分野では「協働」や「共創」についてまとめられたものはあまりありませんので、ぜひ本書を手にとっていただければと思います。

今さら聞けない？今こそ知りたい！

石川 ▶▶▶ 野末

Q 大学の規模や地域によって、連携・協力から協働・共創へ進める際にどのような違いや特徴があると感じていますか？

A 一般論としては小規模大学のほうが動きやすい面はありますが、人間関係が大事になるという難しさもありますよね。一方、大規模大学は組織同士の調整が大変でも、仕組みに乗れば進みやすいという利点もあります。一長一短ですね。ただ、

大きいのは「組織文化」でしょう。各々の「風土」が協働・共創の成否を左右することがあります。大学の規模や国公立の別よりも、それぞれの組織文化に合った進め方を見極めることが協働・共創を成功させる鍵だと思います。

島田 ▶▶▶ 野末

Q 図書館が変化するなかで「協働・共創」という言葉がよく聞かれるようになりました。その背景について、これまでの経験や研究からどのように考えますか？

A 情報リテラシー教育を例にすると、かつては図書館の使い方やデータベースの操作法などを教えればよかったのですが、いまは学生の所属学部や授業の内容、進路などまでを理解しなければ質の高い支援ができません。図書館が学習支援を重視するようになり、図書館だけで完結する時代ではなくなりました。よりよいサービスを提供するためには、学部・学科や教務部門など学内他部署との連携が不可欠となり、「協働・共創」が求められるようになってきたと考えています。

豊田 ▶▶▶ 野末

Q 先ほど「協働」の定義をお聞きしましたが、「共創」のほうがよりハードルが高い印象があります。「共創」の定義や大学図書館での具体的な事例を教えてください。

A 「協働」は、異なる部署や組織などがそれぞれ目的を持ちながら協力している状態を指します。一方、「共創」は、何かを創るという「活動」そのものに重きが置かれています。両者には視点の置き方に違いがあります。

事例としては、少し前からのものですが、例えば神戸学院大学の「図書館留学」が挙げられます。図書館所蔵の英語資料を活用しつつ、学内の関係部門と一緒に、留学生や留学に興味のある学生などが集まって交流・学習できる場をつくっている取り組みです。協働・共創の好例といえます。

「教員が行う協働・共創」

石川 敬史 氏（十文字学園女子大学教育人文学部
文芸文化学科教授）

「教員が行う協働・共創」、定義については先ほど野末先生からお話をいただきましたが、一人でやることは難しく、協力者や関係者とのつながり、信頼関係があってこそ可能になります。多くの方々のサポートがあるからこそ活動ができる、という感謝の気持ちをまず2章に書かせていただきました。続いて、主に三つの視点、時間、対象、教員としての立ち位置について書きました。

・時間—教員の活動時間の中で

一つ目の時間は、教員の活動時間についてです。授業中か授業外か。教育・研究・社会貢献そして学務（入試募集、教務、学生委員会など）、そういった教員の活動時間の中で、この協働・共創をどのように位置づけていくのか、ということです。

ただ私は、埼玉県南部の女子大におりますので、国立大学や大規模大学とは様子が異なり、特に学生の教育に力点が置かれています。ピントがずれているかもしれませんが、教員がいつ協働・共創を行うのか、そのあたりを書いたのが時間の視点です。

・対象—誰とどのような方々と

二つ目が対象です。誰と、どのような方々と協働するか。当然学生も入りますし、企業団体や自治体の方などもあります。ここでポイントになるのが、協働・共創を担う当事者や対象以外に、大学内の職員の方々の理解やサポートの存在です。

出張で行く時に授業を休講にしたり、ゼミ学生を連れ出す際に学生が履修している授業の欠席への配慮をお願いしたり、「石川さんがやってるならいいか」という学内での信頼関係の構築は重要です。当事者だけで何かをやるのではなく、自分が働いている教育研究環境への感謝も、この対象に含まれると考えています。

・立ち位置—プロセスと生き方

三つ目が立ち位置です。成果ばかり求められる昨今ですが、ここに行き着くまでのプロセスも重要視すべきではないか、ということです。

学生は学年進行とともに入れ替わり卒業していきます。毎年異なる学生が参加するので、右肩上がりに成長していく活動なのかどうか、という問いもあります。

また生き方という視点もあります。昨日、大学の同窓会に参加しましたが、卒業生が大学に戻ってくる時、彼女たちの生き方やキャリアの中で、協働・共創がどのように記憶として残っているのか、卒業生や在学生の生き方の中で、協働・共創がどのような位置を占めているのか、そういった広い視点についても書きました。

今さら聞けない？今こそ知りたい！

野末 ▶▶▶ 石川

Q 他の教員の協力や理解を得るための秘訣は？

A 最初からガツガツ動く「何をしているんだ」とハレーションが起きやすいので、私はまず静かに始めます。「私たちやっています」と強く出さず、関心をもった先生から問い合わせがあれば丁寧に応じる、という小さな積み重ねです。そうしていると、次第に「そんな取り組みをしているんですね」と学内に自然と広がっていきます。また、大学の広報の方に活動を少し取り上げてもらうと、教職員にも認知されやすくなり、協力の輪が広がっていくと感じています。

島田 ▶▶▶ 石川

Q 石川先生は、大学職員から教員へなっていますが、教員の立場から職員はどのように見えますか？また、立場の変化での、意識やイメージに変化は？

A 理工系大学図書館で十年以上勤務し、情報リテラシーや理系データベースのガイダンスを行っていました。当時は職員が授業に登壇することに批判もありましたが、今はキャリア教育などで職員が積極的に関わるケースが増え、環境は大きく変わったと感じます。教員への働きかけは、職員の側から積極的に行ってよいと思います。特に、三年生のゼミや、企画・構想系、ワークショップ系の授業への提案は効果的です。多くの教員は翌年度の授業内容をちょうど考えている時期があり、とくに専門外の科目を担当する際にはアイデアに困ることもあります。そんな時に図書館から「こういう形で一緒にできますよ」と提案があると、教員側も前向きに受け止めやすく、「では一緒にやりましょう」と協働につながっていく、というイメージです。

豊田 ▶▶▶ 石川

Q 教員との協働にハードルを感じている場合、まず何から始めればよい？

A ゼミや演習科目は協働の入り口になりやすく、researchmapや研究業績から先生方の専門や今の関心を調べて、近いテーマで声をかけてみるのも有効です。また、学内の委員会で一緒になる先生と日頃からつながりを作っておくと、授業の一コマの相談など小さな協働が生まれやすくなります。多くの教員は授業準備やシラバス作成で忙しく、アイデアに困る時期もあるため、「こういう素材がありますよ」とタイミングよく提案すると協働のきっかけになりやすいと感じています。

「職員が行う協働・共創」

島田 貴司 氏(立正大学学術情報部部長、IAAL理事)

この本を執筆するきっかけになったのが、IAALが今年度(2025年度)から開始したオンラインイベント“Evening Cafe Online”です。誰でも気軽に大学の様々なテーマについて学べる、「今さら聞けない?今こそ知りたい!」とライトに学べるような講演、勉強会をさせていただいたところからスタートしています。そのため、本の内容もかなりライトな感じにさせていただこうと思っています。

そして、私が担当する3章「職員が行う協働・共創」ですが、私がこれまで行ってきた立正大学における学生協働、地域連携を中心に取り扱っています。一つの個別事例ではありますが、可能な限りどのような状況で行ったのかという背景や、どのような意識で臨んでいたかという点などについて記載しました。大学図書館のみならず、公共図書館や学校図書館、または地域や企業の方々でも何かのアイデアや参考にさせていただける部分があるのではないかと思います。

・立正大学での実践

私はこれまで、立正大学の品川キャンパスと熊谷キャンパスで、図書館業務に携わってきました。品川キャンパスでは2011、2012年頃から学生協働を始め、その後、地域連携を展開しました。当時は手探りの状況でした。

熊谷キャンパスでも同様に異動した2019年より学生協働と地域連携を進め、現在も進行中です。品川での経験があったため二回目という位置づけでしたが、地域性の違いやコロナ禍による学生の行動様式の変化も加味しながら進めています。

・大切なポイント

一番大切なのは、学生の成長を定期的にウォッチし声かけすること、そして職員と学生と地域の連携による相乗効果をどう生み出すかを考えていくことです。

学生が純粋に作業をするだけではアルバイトになってしまいます。そうではなく、募集時に「インターンシップ的な取り組みを四年間やっていただきますが、大丈夫ですか?」と問いかけ、同意した学生を採用します。採用後は定期的に成長を見守り、一年生から四年生への成長過程を職員と共有しながら、「次はこういことをお願いしてみよう」と進めていきます。

・地域連携について

地域連携については、詳しくは本に書いていますが、地域は高齢化と労働人口の減少もあり、人手不足も見られます。そこに対して大学がどうアプローチできるのか、また、学生協働と連携しながら地域に根付いていけるかを意識して書きました。学生の持っている多様な能力や価値観と、地域が大切にしている特色や人々の絆が融合することで新たな成果が生まれます。それをサポートし、リードすることがこれからの図書館ができる一つの可能性だと感じています。

今さら聞けない?今こそ知りたい!

野末 ▶▶▶ 島田

Q 結局、何をやるにもお金が必要ですね。その工面の仕方や工夫は?

A 新しく予算を伴う取り組みは「成果は?」と問われがちなので、まずは予算を前提にせず身のまわりにある物などを活用してできる工夫を探ることが大切かなと考えています。品川図書館で勤務していた頃は上司とことあるごとに廃棄物置き場を見に行きました。食堂で食品サンプルを展示していた棚があった時には、「これ、展示ケースに使えるよね」と管理部署に掛け合ってもらってきて、図書館で使いました。そのようなことを繰り返していく中で成果に結びつけて、「こんなに成果が出ました。こんな良い意見をいただきました」ということ上に見せて、そこから「だから予算をつけてください」という次の段階に進めると思います。

石川 ▶▶▶ 島田

Q 司書課程の授業、教員との授業外での連携や協力体制について教えてください。

A 司書課程の授業で1コマいただき図書館の説明をする取り組みを継続しています。また図書館の運営委員会などで「授業と連携できます」と声をかけ、興味を示す先生には積極的に提案します。地方入試の出張で先生に同行する機会があれば、事前に研究分野を調べ、「図書館でこう活用できます」とアプローチします。若い先生は特に反応が良く、授業やゼミで図書館のサービスを利用してくれることも多いです。興味を持ってくれた先生には必ず後日フォローし、次の展開へつなげています。

豊田 ▶▶▶ 島田

Q 学生対応でうまくいかない場面もありますよね。乗り越える工夫は?

A 学生協働を始めてもう15年くらいになりますが、最初の頃は本当に手探りで、「こうした方がいいんじゃない?」と“あるべき論”が先走り、言い方がきつかったと学生に指摘されて落ち込んだり、かなり試行錯誤しました。ちょうど子育て期と重なっていたこともあり、家で読んでいた“承認する”“否定しない”といった育て方の本が、学生との関わりにも役立つんじゃないかと気づいて実践していきました。また、学生協働を束ねるにはリーダーシップが要ると感じ、サーバントリーダーシップなども学びながら、学生の意見をまず受け止める姿勢を大事にしました。そうした積み重ねの中で、学生の反応が少しずつ変わっていき、「ああ、うまく回り始めたかな」と感じられるようになりました。新しい知見を学び続けて実践していくことが重要であると感じています。

「協働・共創を実施する上での意識・考え方・スキル」

豊田 哲也 氏(BIPROGY株式会社 人的資本マネジメント部、IAAL理事)

・執筆の背景

15年以上前ですが、私は私立大学図書館職員として4年間の勤務経験があります。当時、学生協働活動の担当として、先輩職員や学生と対話を重ねながら組織のあり方や採用・教育体制の見直しなどに取り組みました。その後別部署で4年間勤務後、キャリアチェンジを決意し、人材育成支援企業の営業職として9年間、様々な業界の人事・人材開発部門のお客様の課題の解決に従事し、自身も管理職としての経験を積みました。この経験で得た知見は学生協働にも通じるものであり、いつかお世話になった図書館業界へ伝えたいと考えていました。今回、大好きな図書館業界へ恩返しができる良い機会と考え、筆を執りました。

・4章の構成

大学図書館で協働・共創を実施する上で大切な要素を「知識・意識・スキル」に分けて紹介しています。

① 知識編

協働・共創活動には複数の人々関わります。人々が「集団」ではなく、成果を生み出す「組織」として活動するために必要な知識として経営学者バーナード氏が提唱した「組織成立の3要素」を解説しています。

② 意識編

3要素の中で最も重要な「共通の目的」の設定方法について、大学図書館職員が関わる様々なステークホルダーとの関係性を例に解説しています。

③ スキル編

3要素に基づいた協働・共創活動を職場で実践するために役立つスキルを3つ紹介しています。

1つ目は「ビジョン設定共有力」。共通の目的を描く際に不可欠なスキルのうち、今回は「共有力」に絞っています。2つ目は「動機づけ力」。特に学生スタッフの意欲をどう引き出すか、心理学を参考に具体的な関わり方を解説しています。3つ目は「情報共有力」。多様な関係者と円滑に協働するためのコミュニケーションの基本をまとめています。

・理論と実践の融合

本章のテーマは、理論と実践の融合です。図書館での実務経験と、企業の組織開発・人材育成支援業務で培った理論を組み合わせ、実践に役立つティップスを凝縮しました。日々現場で奮闘されている皆さんの、明日からの業務のヒントになれば幸いです。

今さら聞けない？今こそ知りたい！

野末 ▶▶▶ 豊田

Q 学生や教職員は入れ替わっていきます。学生協働の理念・ノウハウをどうつないでいけばよいでしょう？

A 理念は学生組織の代替わり時に職員からきちんと伝える必要があります。組織の理念と設定の背景を「明文化・可視化」し、節目に関わる全員で確認し直すことが重要です。一方でノウハウは学生自身で継承できる「仕組み化」が重要です。言い換えると、先輩学生が後輩学生を適切に育成できる体制を整えるということです。学生時代に育成経験を持つことは社会に出た際にもきっと活かせると思いますし、職員はそのような学生の成長機会を意図的に作り出すことが今後ますます求められると考えています。

石川 ▶▶▶ 豊田

Q 本書では“協働のプレーキ”(意欲低下や不満の表面化)に触れていますね。“協働のプレーキ”が起きたとき、どう向き合えば良いですか？

A 相手(学生・教職員)により対応の詳細は異なりますが、共通して重要なのは「傾聴」です。先入観を持たず不満や不安の背景にある原因や価値観を受け止め、解決策を「共に考える」こと、協働活動がより良くなる成長の機会だと前向きに捉えて、対話を重ねていくことが大切です。一方で、解決策が図書館の理念と相反する場合は、相手に理由を伝えた上で健全に協働活動を解消することも必要です。協働相手に合わせすぎて、図書館の目指す方向性と異なる活動を進めるのは本末転倒だからです。もちろん、そうならないように、定期的に活動目的をすり合わせる事が大事です。

島田 ▶▶▶ 豊田

Q 変化が速く、人手も足りない中で“やるが多すぎる状況”になりがちな今、心を軽く保つためのアドバイスを！

A 現場の困難な状況に対し、心が軽くなる考え方を2点お伝えします。

1つ目は、アドラー心理学の「課題の分離」という考え方を参考に、予算縮小や人員配置など「自分ではコントロールできないこと」は健全に諦め、限られたリソースの中でどのような働きかなど、「自分でコントロールできること」に意識を集中することです。これで少しは心が軽くなると思います。

2つ目は、「リフレーミング」という思考スキルを活用し、「事実」の捉え方を変える手法です。例えば「人員削減で仕事が回らなくなった」と嘆くのではなく、「業務効率化やスキルアップに挑戦するチャンスだ」と捉え直してみることで、ネガティブをポジティブに転換でき、前向きなエネルギーが生まれます。この2つの考え方が現場で奮闘される皆さんに少しでも参考になれば幸いです。

【小特集】 NACSIS-CAT40年

NACSIS-CATの40年をどう捉えるか

武蔵野大学名誉教授・IAAL前理事長 小西 和信

目録所在情報システム(NACSIS-CAT)の開始から40年が過ぎたそうです。現役の大学図書館員でもそのことに思いを致す人は少ないのではないかと思います。今も懸命にシステム運用し、サポートをしている方々には失礼な物言いになることは承知していますが、図書館員にとって、メジャーな対象業務ではなくなっているという事の証なのでしょう。立ち上げ期の困難を潜り抜け、何とか軌道に乗り、その後一定程度の隆盛を見るまで、NACSIS-CATの傍らにいた身としては寂しさを禁じませんが、何をノスタルジーに浸っているのだとお叱りを受けそうです。

NACSIS-CATは一言でいうと、全国の大学図書館の所蔵する図書・雑誌(その他の資料を含めて)の所在情報を作るシステムです。作られたデータベースは、「総合目録」となります。そのシステムの母体は、1985年に学術情報審議会の答申で示された「学術情報システムの構想」の一つを実現したものです。

学術情報システム構想というのは、目録所在情報システムによる総合目録の形成、情報検索システムの提供と学術データベースの形成、高速な学術情報ネットワークの構築と運用を三本の柱としていました。実際、答申の翌年に学術情報システムの中核機関として創設された学術情報センター(現国立情報学研究所)が、それらの三つの事業に取り組み、今日までに大きな成果を挙げてきました。

しかし、図書館員だったわたしにとっては、学術情報システムの究極の目的は「総合目録」を作ることにあったと

受け止めておりました。少なくとも、学術情報センターのスタート時点では、NACSIS-CATの成否が大きなウェイトを占めていたと思います。全国の図書館からの期待感もひしひしと感じておりました。何とか成功に導きたいと、当時のメンバーは不眠不休の闘いに挑みました。10年経過した段階で総合目録は、蔵書検索において頼れる存在に成長し、それをベースとしたILLシステムも大学図書館の需要を満たしました。その頃、総合目録はWebcatという名でインターネットデビューを果たし、世間からも認知されるようになったと思います。

このNACSIS-CATの最大の特徴は、「一書誌一レコード」という原則でした。総合目録が大規模化するにつれ、この原則の有効性は、資料を探す利用者にとって大きな福音だったと思います。手前味噌になりますが、ほかの書誌データベースとは歴然とした差があると自負しておりました。当時は、米国製の世界規模の書誌ユーティリティに負けたくないという意識がありました。しかし、重複レコードを忌避するこの原則を維持するには、「レコード調整」(以前は書誌調整と言っていました)作業が欠かせず、大学図書館の大きな負担になっていたことも分かっておりました。

その間、大学図書館側でも、NACSIS-CATを運用する国立情報学研究所側でも、大きな変化が起きており、NACSIS-CATに人的にも予算的にもこれ以上の資源を割くことが難しくなっていました。「レコード調整」のような高度で煩瑣な作業に資源を割く余裕がなくなっただけでなく、システムのダウンサイジングや省力化等の根本的な

改善を図らなければこの先NACSIS-CATの運用継続が危ぶまれることになったのです。大学図書館と国立情報学研究所は、「これからの学術情報システム検討委員会」等で、今後のNACSIS-CATのあるべき姿の検討に入りました。

わたしは2007年以降NACSIS-CATの現場を離れましたが、IAALの活動でつながりがありましたので、検討の経緯について仄聞しておりました。省力化の観点から、「一書誌一レコード」原則を放棄せざるを得ないこと、重複レコードは事後処理によってクリーニングすること、世界規模の書誌ユーティリティに参加すること等々、わたしには納得のゆかないことばかりで、不信感を抱かざるを得なかったことを白状いたします。

しかし先日、IAAL現理事長の岡田智佳子氏にお会いする機会があり、NACSIS-CATの歴史についての論考をおまとめ中であると伺いました。¹⁾氏の分析では、所蔵レコード一億件突破の記念イベント²⁾を境に、NACSIS-CATの需要が減少し、意義も薄らいでいったのだそうです。つまり、「総合目録」そのものへの要求が減ってきたと

いうのです。目が覚める思いでした。

わたしは差し詰め「成功体験の陥穽」に落ち込んでいたプロジェクトメンバーの一人だったのです。自分が関わったプロジェクトを成功したというのは烏澁がましいのですが、「わたしたちと同じように努力すれば乗り越えられる」とどこかで思っていたようです。これが「老害」なのだと恥じ入っています。時代の変化を捉え切れなかったようです。

そこで、メジャーな話題ではなくなったNACSIS-CATですが、現在の需要に見合った形への改革、改善を応援したいと思っております。おそらくNACSIS-CATの検討は、いま情報提供サービス全体の視野から(あるいはその枠をも超えて)、何が求められているのか、その求められているサービスに、大学図書館、国立情報学研究所が取り組んでいかなければならないと思います。あえて一言追加しますと、インフラとなったNACSIS-CATの行く末を考える際には、それを水や電気のように利用している多数のユーザがいることを忘れることのないようにお願いしたいと思います。

編集部註

1) 岡田智佳子. 目録所在情報サービス(NACSIS-CAT/ILL)40年間の軌跡-再構築に向けて-.

The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 16 187-201, 2026.3

2) 2008年7月、NACSIS-CATにおける所蔵レコードの登録件数(雑誌を含む)が1億件を突破し、続いて2009年4月には図書単独の登録件数においても1億件を超えた。これを記念して、NIIは2009年2月に「NACSIS-CAT登録1億件突破記念講演会」を開催した。

【小特集】NACSIS-CAT40年

NACSIS-CAT 40年のその先に

IAAL理事長 岡田 智佳子

2025はメモリアルイヤー

2025年度、私はいくつかの場でNACSIS-CATについてお話しする機会をいただきました。毎回「2025年はNACSIS-CAT40周年、図書所蔵件数1.5億件突破のメモリアルイヤー」という話題から話を始めていたため、「またか」と思われた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、私がこのことを繰り返しお伝えしてきたのは、単なる個人的な思い入れからではありません。40年にわたり、1.5億件という規模の総合目録を築き上げてこられたNACSIS-CAT参加館および目録担当者の皆様のご尽力に、あらためて敬意を表したいという思いからです。

NACSIS-CATとは何か

ここで、もう一つお伝えしてきたことがあります。それは、「NACSIS-CATとは何か」という点です。

NACSIS-CAT/ILLホームページ¹⁾によれば、NACSIS-CATとは「オンライン共同分担目録方式により、全国規模の総合目録データベース(図書/雑誌)を形成するためのシステム」です。

では、その総合目録データベースは、何のために存在するのでしょうか。

その目的は、相互利用、すなわちNACSIS-ILLにおける所在確認にあります。NACSIS-CATは、単独で完結する目録システムではなく、ILLを前提とした基盤として構築されているのです。

このNACSIS-CATとNACSIS-ILLをあわせて「目録所在情報サービス」と呼びます。その利用者(参加館)の条件の第一として、「目録作成及び図書館間相互貸借(以下「ILL」という。)の受付を行うこと」が掲げられてい

ます(『国立情報学研究所目録所在情報サービス利用細則』第2条²⁾)。

変化する利用実態

ところが最近、NACSIS-CATを「総合目録データベースの構築」ではなく、「自館OPAC構築のためのデータ無料ダウンロードサービス」として利用している参加館が増えているように感じています。

ILLの受付を避けるために所蔵登録を行わない参加館の存在は以前から認識されていましたが、従来は人手不足などやむを得ない事情として黙認されてきたように思います。しかし、ここ数年のNACSIS-CAT統計からは、相当数の参加館において、所蔵登録を停止、あるいは受入図書の一部しか登録しない状況が明らかになっています³⁾。これは、そのようにせざるを得ない事情が、多くの参加館に存在していることを示唆しています。

何が問題なのか

一方で、当然ながらこうした利用方法には問題もあります。ここでは二点挙げたいと思います。

第一に、「統合的発見環境の実現」への大きな障壁となる点です。現在、「これからの学術情報システム構築検討委員会」では、紙媒体資料と電子資料との統合的発見環境の実現に向けた取り組みが進められています。しかし、紙媒体資料の発見環境を担うべきNACSIS-CATにおいて、自館の蔵書を外部から発見されたくないとする参加館が増加している状況は、看過できない深刻な矛盾と言えるでしょう。

第二に、ダウンロードのみの利用は、前述の通り、「目録

所在情報サービス利用館」としての規約に合致しておらず、運営主体である国立情報学研究所や他の参加館の余力に依存する形で成り立っている、不安定な状態にあるという点です。今後、NACSIS-CAT/ILLは、さらに変化していくことが予想され、この状態がある日突然終わる可能性も否定できません。

40年のその先へ

NACSIS-CATはしばしば、大学図書館における水や空気のような、「あって当たり前のもの」と表現されます。しかし、水や空気も、適切な状態を確保し続けるには相応のコストがかかります。NACSIS-CATも同様であり、そのコストやリソースを参加館全体で分担するという考え方のもとで運用されています。

だからこそ、この共同分担の原則を、今一度確認する必要があるのではないのでしょうか。

長い時間をかけて積み上げてきた1.5億件の財産を守り、NACSIS-CATを学術情報基盤としてさらに発展させていくためには、どうすればいいのでしょうか。現状を考える

と、それはとても難しい問いに思えます。それでも、IAALは、参加館の皆様とともに考え、できることを地道に実践していきたいと思います。

これからも、IAALの活動へのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

(註)

- 1) 国立情報学研究所「目録所在情報サービス (NACSIS-CAT/ILL) について」
(https://contents.nii.ac.jp/catill/about/cat_ill/about)
参照：2026-01-04
- 2) 国立情報学研究所「国立情報学研究所目録所在情報サービス利用細則」最近改正 令和3年1月21日
(<https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/catill/2022-03/saisoku.pdf>)
参照：2026-01-04
- 3) 公開統計情報を基にしたNACSIS-CATの現況と課題については、「2025TP&Dフォーラム」(2025年11月23日開催)に詳しい。内容については『情報の科学と技術』2026年5月号掲載予定。

募集しています!

正会員

年会費

5,000円

この法人の目的に賛同し、NPO社員として一緒に活動・運営に関与してくださる個人の方

団体会員

年会費

30,000円 / 1口

この法人の目的に賛同し、協力していただける団体・法人

賛助会員

年会費

無料

大学図書館支援機構の企画に積極的に参加しようという個人の方

詳しくはこちらから <https://www.iaal.jp>

学術コミュニケーションの未来を創造する ～ScholAgoraの挑戦～

ScholAgora顧問 尾城 孝一

学術研究が社会に貢献し、持続的に発展していくためには、多様性を包摂した、公平で開かれた学術コミュニケーションが不可欠です。このコミュニケーションの主役は研究者であることに疑いはありませんが、健全なエコシステムを確立するには、研究者自身に加え、大学などの学術研究機関、学協会、出版社、政府機関、企業など、多様な関係者による垣根を超えた協働が求められます。しかし、それぞれの立場で異なる課題や認識を持つ関係者が一堂に会し、建設的な対話を深める場はこれまで存在していませんでした。

特定非営利活動法人 ScholAgora(スカラゴラ)は、まさにこのミッシングリンクを解消し、学術コミュニケーションの新たなビジョンを描くために、前身であるUniBio Pressを改組し、その活動領域の拡大をめざして2024年11月に誕生しました。ScholAgoraは、関係者が所属母体の枠を超えて平等な立場で集い、互いの立場を理解しながら、現在の課題解決に取り組み、未来の青写真を描くことを目指すコミュニティです。

日本には、国の機関、学術図書館の協会やコンソーシアムといった、学術コミュニケーションを支えるさまざまな大規模な組織が存在します。ScholAgoraは、人的な資源や運営資金の規模において、これらの大組織に遠く及びません。しかし、私たちはスケールに頼るのではなく、「小粒でもピリリと辛い組織」を目指します。今日の情報社会では、鋭い洞察と示唆に富んだ提案は、SNSなどを通じて瞬く間に拡散し、学術コミュニティ全体を揺り動かす大きな潮流を生み出す可能性があります。私たちScholAgoraが、学術コミュニケーションに携わる人々の琴線に訴えかけるような切っ先の鋭い提案を生み出すことができれば、その活動は「限界費用ゼロ」で広範囲に拡大し、大きなインパクトを持つことができると信じています。

私たちが今まさに直面しているのは、AIの急速な進展によって加速される時代の大きな転換点です。これまでは、他人から与えられた課題を効率よく解く能力を持つ「問題解決者」が重宝されてきましたが、その価値は徐々に下がりつつあります。代わって評価が高まっているのは、将来のビジョンを描き、その理想と現実とのギャップのなかに新たな課題を創り出し、その解決に挑む「問題提起者」です。ScholAgoraは、まさにこの「問題提起」の場です。学術コミュニケーションの現場で日々活動している多様な当事者が集い、「あるべき姿」を議論し、既存の枠組みにとらわれない新しいアジェンダを生み出していくことこそが、私たちの最大の挑戦であり、このコミュニティの存在意義です。

ScholAgoraは会費制の組織であり、年会費は3,500円にすぎません。この会費は、セミナー開催経費やコミュニティ運営の諸経費に充てられていますが、ここで明確にしておきたいのは、会費はサービスや便益への対価ではないということです。このわずかな会費は、あなたが学術コミュニケーションの新たな課題を創出し、その解決に仲間と共に取り組む機会を得るための参加費だと考えてください。

ScholAgoraの挑戦は、まだ始まったばかりです。研究者、図書館員、URA、企業関係者など、学術コミュニケーションに携わるすべての関係者の心に深く刺さる先鋭的な提案を生み出し、会員同士の連携、そして既存組織との協働を通じて、これからの学術コミュニケーションの新たな姿を共に形作っていきたいと考える方は、ぜひScholAgoraにご参集ください。一日あたりわずか10円の投資が、日本の、そして世界の学術文化の未来を変える一歩となるかもしれません。

特定非営利活動法人 ScholAgora
<https://scholagora.smoosy.atlas.jp>

IAALの翻訳業務

錦織 嘉子

IAALが日英翻訳業務を代行していることをご存じでしょうか。

オープンサイエンスの時代、大学や研究機関が研究成果や活動を世界に発信する重要性はますます高まっています。ウェブサイトや機関リポジトリ(IR)を通じた情報発信は欠かせず、海外の利用者にとってわかりやすく利用しやすい媒体やプラットフォームの整備が求められています。

昨今はAIや自動翻訳の精度が向上し便利になっていますが、機関を代表する大切な情報をそのまま機械に任せてよいのか、不安に思われる方も多いのではないのでしょうか。そうした時にぜひご活用いただきたいのが、IAALの翻訳サービスです。学術情報流通や研究データ・認証基盤分野の知識を備えた翻訳者が、ニュアンスを大切にしながら、正確で読みやすい英訳をご提供します。

翻訳を担当する錦織は、これまでIAAL会員として国立情報学研究所(NII)の各種事業のウェブサイトや関連資料を長年にわたり翻訳してきました。具体的には、学認や認証基盤関連、研究データ基盤(JPCOAR、CiNi Research/Books、学術機関データリポジトリなど)、電子リソース共有サービス(ERDB-JP)、大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)、SPARC JAPANといった幅広い分野の翻訳に携わっています。さらに、米国国立標準技術研究所(NIST)など海外の関係機関の参考資料の和訳も手がけ、「専門性を理解した的確な翻訳」と高い評価をいただいています。また、国際学会発表資料などの翻訳・英文校閲では、「聴衆に伝わりやすい表現」や「発音しやすい語彙」を工夫するなど細やかな調整を行っています。

これまで大学図書館の業務や運営を支援してきたIAALだからこそ提供できる、専門性の高い日英翻訳。今後はIAALを通じて、大学図書館や研究機関の皆さまの翻訳ニーズに幅広く対応していきたいと考えております。たとえば、機関のウェブサイトや年次報告書・定期刊行物、研究プロジェクトの紹介文、国際会議での発表原稿など、英訳・和訳を問わずご相談いただけます。

質の高い翻訳をリーズナブルな料金で。IAALが責任を持って仲介し、信頼できるサービスをご提供いたします。ぜひお気軽にIAALまでご相談ください。

※料金の詳細につきましては、別途資料をご用意しております。ご遠慮なくお問合せください。

コラム

アイルランド便り

筆者は現在、アイルランド西部コネマラ国立公園近くに暮らしています。大西洋に面し「一日に四季がある」といわれるこの地域の風景は、実にドラマチックです。地質は主にコネマラ花崗岩で、その上に何千年もの歳月をかけて形成された泥炭地(ブランケットbog)が広がっています。木々はほとんどなく、岩だらけの荒涼とした大地ですが、その中に繊細で静かな美しさが潜んでいます。丘一面に茂る常緑低木のヒースは、夏から秋にかけて小さな釣鐘型の紫色の花を咲かせ、この季節、丘はまるで紫の絵具で染めたかのように鮮やかに彩られます。

翻訳者経歴

にしごり よしこ
錦織 嘉子

翻訳者・通訳者。国際基督教大学を卒業後、英国レスター大学で美術館学修士号を取得。その後、ロンドン・メトロポリタン大学にて通訳学修士ディプロマ課程を修了。

2007年よりフリーランスとして活動を開始し、教育・学術分野を中心に翻訳・通訳を手がける。IAAL会員として国立情報学研究所(NII)の各種事業の翻訳に多数従事し、専門性を理解した的確な翻訳と丁寧な対応に定評がある。

現在はアイルランド西部ゴールウェイ市郊外に在住。趣味は自然観察とクラフト。



展覧会「戦後80年 壺井栄『二十四の瞳』 ～図書館情報学の世界から～」の開催

筑波大学図書館情報メディア系 大庭 一郎

1. 図書館情報学とは

日本では、「図書館情報学」という名称から「図書館」「図書館員」「司書」「図書館員になるための学問」を連想する人が多いと思います。図書館情報学は、図書館職員の仕事を体系化するところから始まった学問ですが、情報メディアの発展と情報メディアを扱う基礎技術の進展に伴って、その対象領域を拡大し教育・研究内容を高度化してきました。

日本の図書館職員養成は、1919(大正8)年に文部省の乗杉嘉壽が「図書館員を専門的に養成すべし」という事を建議し、1921年に設置された文部省図書館員教習所が起源です。その後、図書館情報大学(1979-2004)を経て、現在の筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類へと継承されました。石井啓豊(筑波大学教授)は、図書館情報学を「社会における知識の共有を保持するという社会的価値を追求する総合的領域」として位置づけ、「図書館情報学は、情報メディアの集積を社会的知識資源として捉え、その視点から社会における知識共有と、それを実現する情報メディアと社会的仕組みを人間、社会、文化、情報、技術などの多様なアプローチから解明し、設計し、社会に働きかける」と規定しました¹⁾。現在、知識情報・図書館学類では、「記録による知識共有の重要性」を理解し、「知識共有の制度や技術」に熟知した人材養成を進めています。欧米諸国と異なり、日本では図書館情報学が十分に普及していないため、幅広い世代に図書館情報学への興味・関心を抱いてもらう方法はないか、私は試行錯誤してき

ました。10年ほど前、壺井栄の『二十四の瞳』(1952)を題材として「文献世界の宇宙」の全体像を提示できれば、図書館情報学の世界を多面的に紹介できる、と思いつきました。そこで、私の研究室では、「知識共有」の出発点から多様なメディア展開までの実例として、壺井栄の『二十四の瞳』に関する網羅的なコレクションを収集してきました。

2. 壺井栄の『二十四の瞳』

香川県小豆島出身の壺井栄(1899-1967)が執筆した『二十四の瞳』は、壺井栄の代表的な小説のひとつです。1952(昭和27)年にキリスト教系の家庭雑誌「ニューエイジ」に10回連載され、同年12月に光文社から刊行されました。この小説は、第二次世界大戦前後の社会を背景として、瀬戸内海べりの一寒村の岬の分教場に赴任してきた若い女性教師と12人の教え子との交流を描いています。1954年に木下恵介監督・高峰秀子主演で映画化されると人気を博し、原作の『二十四の瞳』も多くの読者を獲得しました。『二十四の瞳』は、小学校高学年から大人まで世代を超えて読むことができる小説です。壺井栄が考えた『二十四の瞳』の構想は、原稿用紙に執筆され、雑誌連載を経て、単行本や全集の一冊として約100冊刊行されました。さらに、映画・演劇・テレビ・ラジオ放送の原作として取り上げられ、多くの人々に『二十四の瞳』の世界が伝えられました。



睡鳩荘



睡鳩荘2階展示室I

3. 展覧会「戦後80年 壺井栄『二十四の瞳』」の概要

2024年の夏、軽井沢高原文庫の関係者からお声がけを頂き、同年秋に「軽井沢タリアセン」内の睡鳩荘で展覧会「石井桃子とクマのプーさんの世界」を開催しました²⁾。この展覧会が盛況を収めた結果、軽井沢高原文庫館長の大藤敏行さんのご尽力を得て、戦後80年の節目の2025年夏に展覧会「戦後80年 壺井栄『二十四の瞳』～図書館情報学の世界から～」(会期：6月28日～8月31日)を軽井沢タリアセン・軽井沢高原文庫の主催で、睡鳩荘2階で開催することになりました。壺井栄は、小豆島との縁が深い作家ですが、1951年以降、夏から秋にかけて信州の上林温泉に赴き、塵表閣に滞在して原稿を執筆しました。1956年8月に中軽井沢の上ノ原に別荘を新築してから、毎年5月から11月頃まで別荘で仕事をするのが習慣となり、軽井沢ゆかりの文学者の一人になりました。

展覧会に出展した『二十四の瞳』の関連資料は、図書館情報学の視点で収集しました。現在、図書館情報学は、「知識共有現象」を対象とする学問領域へと発展しています。そこで、多様なメディア展開の実例として、①直筆原稿(複製)、②作品の初出掲載雑誌、③初版本から各種の単行本・全集の一冊・児童書、④研究書・研究論文、⑤映画化・テレビ番組化された映像資料、⑥映像資料の脚本・シナリオ・スチール写真、⑦海外で翻訳出版された図書、⑧『二十四の瞳』に関する観光グッズ等の一端を展示しました。会場の旧朝吹山荘「睡鳩荘」は、実業家・朝吹常吉(三越社長等歴任)が1931(昭和6)年に旧軽井沢の愛宕山に建てた朝吹家別荘です。2008年にご遺族から寄贈頂いて、軽井沢タリアセン内に移築されました。睡鳩荘は居心地の良さを追求したW.M.ヴォーリズ設計の軽井沢別荘建築の優れた作品で、2017年に国登録有形文化財に登録されました³⁾。

睡鳩荘2階の展示室IIには、「二十四の瞳」の直筆原稿(複製)、『二十四の瞳』初版本、海外で翻訳出版された図書等を展示しました。ロシア語版『二十四の瞳』は、長年、ベラルーシ共和国で日本語教育に携わられている辰巳雅子さんと生徒さんが翻訳されたものです⁴⁾。このロシア語版は、展覧会開催に向けて、私と軽井沢高原文庫用に辰巳さんが寄贈して下さいました。展示室IIでは、壺井栄の直筆原稿・書簡・葉書、壺井栄の全集、各出版社から刊行された文庫本の『二十四の瞳』等を展示しました。展示室IIIには、映画化・テレビ番組化された『二十四の瞳』の映像資料、映像資料の脚本・シナリオ・スチール写真、観光グッズ等を展示しました。『二十四の瞳』の映像資料では、主人公の大石久子先生を高峰秀子、八千草薫、倍賞千恵子、田中裕子、黒木瞳、松下奈緒などの女優が演じています。この展示室IIIの中では、幅広い年代の来館者が、大

石先生を演じた女優さんの思い出を語る姿が見られました。展示室IVには、図書館情報学の発展を示した展示パネル、図書館情報大学と図書館情報学の発展に尽力された図書館情報大学学長の吉田政幸先生(1935-2003)の著書と手紙、筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類の紹介資料等を展示しました。2025年に、知識情報・図書館学類は創基106周年を迎えました。2020年以降、大学院教育は、情報学学位プログラムとして展開しています。この情報学学位プログラム(博士前期課程)は、オンラインでも学修可能な教育体制を整備しました。国内外の志望者が場所や時間の制約を超えて、大学院で学修し、高度な情報専門職として活躍することが期待されています⁵⁾。

展覧会の開催に際して、軽井沢町教育委員会にご後援を頂き、出版社(五十音順)の岩波書店、KADOKAWA、講談社、樹村房、新潮社のご協力を頂きました。

4. 図書館情報学の理解を深めるために

今回の展覧会では、壺井栄の『二十四の瞳』を題材として「文献世界の宇宙」を提示しました。『二十四の瞳』は、「知識共有現象」の具体例としてだけでなく、戦争と平和を考える文学作品として、読み継がれてほしい名著です。日本社会で図書館情報学の理解を深めるために、図書館情報学の視点を活かした展覧会を開催することは有効ではないか、と思います。機会があれば、児童文学作家・翻訳家や直木賞作家に注目した全著作展を開催したいと考えています。

参考文献

- 1) 石井啓豊.“図書館情報学の展望：知識共有の総合科学”. 図書館情報大学史：25年の記録. 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科編. つくば. 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科. 2005.3. p.28-40. 引用はp.33.
- 2) 大庭一郎. 展覧会「石井桃子とクマのプーさんの世界」の開催. 軽井沢高原文庫通信. 2024.12. no.104. p.2. <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/2014862>
- 3) パナソニック.“すまいの文化を訪ねてvol.2 睡鳩荘(旧朝吹山荘)”. パナソニック株式会社. https://www2.panasonic.biz/jp/tamarie/sumai_no_bunka/0002/
- 4) 辰巳雅子.“2025-06-01軽井沢で展覧会「戦後80年 壺井栄『二十四の瞳』～図書館情報学の世界から～」”. ベラルーシの部屋ブログ. <https://nbcj-09091999-blog.hatenablog.com/>
- 5) 筑波大学 人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 情報学学位プログラム. <https://informatics.tsukuba.ac.jp/>

(URL最終確認：2025年12月25日)

第19回2024年度通常総会

2025年7月26日に第19回2024年度通常総会が行われました。

- 2024年度（第18期）の活動及び財務状況について報告があり、承認されました。
- 新理事として吉野知義氏（元神田外語大学）、豊田哲也氏（BIPOLOGY株式会社）の就任が承認されました。

また、総会後に開催された理事会において、理事の互選により、岡田智佳子理事長および米澤誠副理事長が再任となりました。

2027年6月にIAALは設立20周年を迎えます

2007年6月20日に特定非営利活動法人の認証を東京都から受けて以来、IAALは活動を続けてきました。設立20周年にあたる2027年に向けて、IAALではさまざまな試みを計画中です。その一つとして、株式会社樹村房様との共同企画『図書館の羅針盤』シリーズを創刊します。

図書館実務をわかりやすく丁寧に教えてくれる 書籍シリーズ『図書館の羅針盤』

第1弾として次の2冊を刊行します。

①今さら聞けない？ 今こそ知りたい！

大学図書館における協働と共創 学びをつくる／ひろげるために

- ▶ 大学図書館支援機構が大学図書館実務を基本から気楽に学べる場としてオンラインで開催し、好評を博した企画を待望の書籍化
 - ▶ 協働と共創の概念から教員や職員による具体的な実践事例、実践に役立つ知識、スキルをまとめた一冊である
 - ▶ 2026年6月頃刊行予定 A5判 約120ページ
- 執筆者 野末俊比古 石川敬史 島田貴司 豊田哲也

②ゼロからスタート！

NACSIS-CAT入門 日本目録規則2018年版対応

- ▶ NCR2018適用後NACSIS-CATの入門テキスト
 - ▶ NACSIS-CATを利用する上で知っておくべきことを基礎からやさしく説明
 - ▶ 自習用として、また講習会や司書課程の目録演習のテキストとして
 - ▶ 2026年夏頃刊行予定 A5判 約120ページ
- 執筆者 岡田智佳子

> COVER story



何かを新しく始めることは、飛行機の離陸に似ています。期待と不安が交錯し、多くの可能性が光り輝いている、そんな状態です。(S)

編集後記

15号から半年後に16号をお届け予定が、なんと2年が過ぎてしまいました…！

首を長くして待っていただいた方、大変お待たせいたしました。言い訳になってしまいますがIAALはとっても小さな団体でして刊行までにとっても時間がかかってしまいました。ごめんなさい。カメさんペースのIAALですが、次号もゆっくりお待ちいただければ幸いです。